



automation

片桐天音

煙突

「洗濯物をとりこみたい人生だった」

「あら、急にどうしたんですか？」

はあ、と芝居ががって溜息をつくA子を見て、B子がぐすくすと笑った。

「すぐに雨が降るわ。また、服がだめになっちゃう」

A子が指差す煙突は天高く、ずっと空の向こうでもくもくと黒い煙を吐き出している。青い空はずっと不気味に濁ったままで、たとえその向こうに何があっても私には分からないだろう。雲ひとつない暗い快晴は心まで息苦しくする。

「雨が終わったら、新しい服を探さないといいけませんね」

「まあ、気分転換にはなるかしら」

黒い煙が出た次の日は、辺り一面肉の焦げた嫌な臭いがするから嫌いだ。何日かそれが続いて、とうとう吐き出されるのが白い煙になって、最後には煙突の呼吸がすっかり止まる。その間はずっと汚れた雨が降り続けて、外に干していた服はもちろん、屋根や窓、植物も土も全部同じ色に塗りつぶされていく。乾いた汚泥はそこらじゅう

で舞い上がって、呼吸に混じってまた人を傷つけるのだ。

大煙突は二百メートルあるのだと、B子が前に言っていた。図書館で読んだのだという。私たちが生まれるずっと前からそこにあって、私たちが死んでもそこにあり続けるのだ。永遠の経済成長の象徴であったあの建築物は、不滅ゆえにそこに縛り付けられ、いつの間にか滅びゆく街のプロセスに組み入れられていた。

煤煙は徐々に空気と混ざって見えなくなるけれど、決して消えることはない。風の吹かないこの街で、煤も煙も、空気にこびりついていく。

小さい頃は巨大なものが好きだった。天にそびえる大煙突を見上げられるこの公園で、声を張り上げて騒いでいたのをよく覚えている。

天国の空には、きつと透き通るような青の水彩が引いてあるのだと思う。そうでないと、目が覚めてからどこにいるのか分からなくて困ってしまうから。

「また、狭い図書館暮らしの始まりね」

急に立ち上がると、ばんばんになったリュックが少し身体を揺らしてから、足元で枯れ葉が乾いた音を立てた。泥

と一緒にばらばらと砕け散った葉が、私の足に煽られてふわりと舞い上がる。私は思わず口に手を当てて、B子もそれに倣って制服の袖を口元に当てた。

「A子さんと狭い部屋で眠るの、私は好きですよ」

ぼんやりと大煙突の方に目を遣って、雨が降るのは嫌ですけど、と続ける。横顔が少し楽しげに見えた。

「そんな話、してないわ」

「A子さんはお嫌ですか？ 私と眠るのは」

「そうね、まだ——」

まだ、二人とも生きてるんだなって、本当に心の底から実感する。そう口に出すと、自分が弱くなってしまったように思えた。B子の熱を感じて、匂いを感じて、私よりもゆるやかな呼吸に合わせて優しく息をすると、いつもよりもよく眠れる。

保存料がたくさん入った味気ない缶詰と白飯を食べていても、地下から見つけ出した瓶詰めの水を飲んでいても、生きた心地がしないのだ。明日もこうして歩くことができるだろうか、何も見つからずに動けなくなってしまうのではないかと、恐ろしくなる。

「私たちは、死にませんよ。絶対に」

B子が立ち上がって、私たちはまた口を押さえる。この一瞬の動きにはもはや意味などなかったが、そうするのが二人の秘密の合図になっていた。

「そろそろ帰りましょう。食料は十分に集まりましたし、これならしばらくこもっていられますよ」

*

街を複数の——おそらくは数十体の——アンドロイドが巡回している。それらが街に転がる死体を回収し、焼却炉へ集めて定期的に火葬していると聞く。その度に大煙突から煙が吹き上がり、あまた誰かが死んだのだと分かった。どうの昔に撤退した化学工場の簡素な焼却炉を、そのまま火葬場に転用して多くの死体を詰め込んでいるから、なかなか温度が上がらなくて辺りは数日の間ずっと異様な臭いに包まれる。

彼女らは十代前半の少女を模して作られているらしい。年端も行かぬ少女を死体回収の手伝いに出す親はそう多くないだろうから、すぐにそれが感情のないロボットな

のだと分かる。表情一つ変えない娘たちに看取られて燃やされるさまを見て、誰かが理想郷と言った。識別子の前に「理想郷」を冠してそれを呼ぶのだ。呼ばれるたびに、彼女らの眼はそこにあるのが命ある肉体かどうかを確かめる。

魂の抜けた肉体を放っておく以上の不衛生はない。街のシステムは公衆衛生上の観点においては、実に正しい判断をした。ただ、肉体を燃やし尽くしても毒が消えないとは誰も思わなかっただけだ。

死体を燃やすたびにばたりばたりと人が倒れ、新たな死体が生まれるたびに燃やされていく。イレギュラーな事態にもアンドロイドたちは落ち着いて、いつもと変わらず死体を回収し続けた。樂しげに皆で労働歌を歌っていたという噂も聞く。

彼女たちはずっと正常に動いていて、むしろ異常なのは生き残っている私の方なのだ。

*

A子と手を繋いで帰るときはいつも、A子の手が熱い

のか、私の手が熱いのか分からなくなる。頬が熱いのはB子自身のせいだと思いき知らされるけれど、顔や額もくっつけてずっとキスしていれば、何もかも一つになってしまっただろうなと思った。

「A子ちゃん。どうしていつも手を繋いで帰るんですか？」
晴れた秋の空はずっと向こうに泳いでいけそうなほどに澄んでいて、夕陽の光は世界中にどこまでも届いていくんだと実感する。

「秋だし、寒いから。それじゃあ、だめかしら？」

「では、どうして夏にも手を繋ぐんですか？」

「……暖かいのが好きなのよ」

何も言わなくても全部私に分かっているのだと、きつとA子は思っている。本当の私はそんなに強くないのに。そうやって寄りかかれるのは、心地良いけれど反対に私の心をきゅつときつく苦しめていた。

「いつも、そう言っていますね」

「だって、いつもそう訊かれるもの」

友達だから、恋人だから。A子はそんなこと、一言も言ってくれない。彼女の手は私を縛り付けて離すまいと

するけれど、A子はそれだけで満足しているのだ。

「ねえ、B子。手を繋ぐのに、ユニークな理由があるの？
いつも同じ理由じゃ、だめ？」

「せっかくな四季がある街に生まれたんですよ？ せめて、
ちよつとくらい、変わってもいいと思うんです」

変わってほしい、とは言えなかった。私の言葉でA子を縛り付けたくはなかったから。私はただ、彼女に好きだと言ってほしただけなのに。

「別に私は、あなたと手を繋いでいなくたって——」

そう言いながら、A子は私から手を離そうとする。私はすかさずその手を捕まえて、きゅつと強く握った。隣で驚いた表情をしているA子に上目遣いで笑いかけると、彼女は照れたようにして下を向く。

今度はA子の手のほうが熱くなっているのをはつきり感じて、ちよつとだけ嬉しくなった。

「離しちゃだめですよ、A子ちゃん。暖かいのは、私だっ
て好きなんですから」

A子の手を引きながら、私はかさりと真つ赤な紅葉を踏みしめた。上からもはらはらと、枝から離れた色とり

どりの葉がやってきて、通学路を彩っていく。こうしていつしか冬が来て、また春が来る。およそ永遠とは対極にあるその景色を見ながら、私は永遠を祈っていた。

*

夜になると雨が一層ひどくなり、窓にどろどろとした雫が叩きつけられる。

管理者を失った建物は急激に荒れ果て、雨漏りが酷くなることも多い。天井に出来た黒い染みが徐々に広がって、そこに穴が開く。そうなるも、もはやそこで安心して眠ることはできない。私の家もB子の家も、すっかり壊れてしまった。

その運命は堅牢に造られたこの図書館も例外ではなく、もう何回か雨が降ったらこの部屋にも黒い刺客がやってきてしまうだろう。街にあるB子との思い出が、ぼろぼろになった建物と一緒に全て壊れていくのだ。図書館はB子の特段のお気に入り、だから最後まで守っていたかった。

白い光を放つLEDのランタンを掲げながら、閉架書

庫の扉を引くと、ぎぎいという音が響いて一瞬びくりとする。書庫の鍵は持っていなかったけど、いつの間にか錠のほうが悪れていた。私はそれを新たな根城の発見としか感じなかったけど、きっとB子は、壊れゆく図書館をまざまざと見せつけられて嫌な顔をしていたのだろうと思う。

この街から誰もいなくなっても、私たちが去ったとしても、大量にある本がここに確かに文化があったと証してくれるのだと、錠の壊れた書庫を見つけた時にB子がそう言った。この図書館は無くないのだと、口に出して自信を持つようとしていた。

冷たい毛布を二人で被って、今日は寒いねと言いながらもう一枚毛布を足す。手を繋ぎ、身体を当てると少しずつ暖まってきて、生の実感が幾分か強くなる。

打ちっぱなしの書庫の壁は、冷たさまでがむき出しになっていた。身体をよじる度に背中からひんやりとしたものが伝わってきて、それを感じる度にB子にまた暖められたくなる。

「ねえ、B子。私が死んだらどうする?」

彼女の身体がびくり、と動いて止まり、それからB子は何も言わずにランタンを消した。急に視界が奪われて、手と耳の感覚が鋭敏になる。

ぎゅつ、と手が強く握られて、彼女の手が冷えているのが分かる。A子が少し力を緩めると、B子はそれを補うように彼女の手を優しく包み込んだ。

冷たくなっていくB子の手のひらと、いつもより少しだけ早い息遣いを感じながら、徐々に目が慣れていく。

「私も、A子さんと一緒に燃やされたくなくと思います」
こちらを向いたB子は、暗がりに隠れていつもよりその不安を顕にしているように見えた。

「あんまり、そういうことを口に出しちゃいけません」

「……ええ、ごめんなさい。雨のせいかしら」

A子が少し不安そうに笑うのを見て、B子が隠そうとしていた暗い気持ちが溢れ出しそうになる。彼女はそれを押しとどめようと指を滑らせて、きゅつと固く絡ませた。はっとした顔でこちらを見るA子に、B子は満足そうに微笑みかける。

「A子さんは、私が死んだらどうするんですか?」

「ふふっ。B子も、訊いちやうのね」

「そんな風に思い詰めた顔をしていたら、私だって気になっちゃうですよ」

B子は、私と一緒に燃やされたいと言った。彼女は私が感情のないアンドロイドに連れて行かれて、モノみたいに焼却炉に投げ入れられるのを見て、どう思うのだろう。「どうしても死ぬのなら、私があなを燃やしてあげる」

私は、B子をあの冷血なアンドロイドたちに引き渡したくはない。もしその時が来たら、百合の花が敷き詰められた棺桶に、私の手で彼女を優しく抱き入れてあげる。私の涙よりもずっと熱い炎が、綺麗なB子を包んですっかりかき消してしまうのだ。

「A子さんに看取ってもらえるのなら、安心ですね」

「でも、私たちは死んだりしないわ。この地獄が終わるまで、終わってからも、ちゃんと二人で生きていくの」

私はB子の言葉を代弁した気になって、そうよね、と確かめると、彼女はしっかりと私の目を見て頷いた。

「手を繋いで綺麗な景色を見ながら帰るんです。絶対に」

B子はそう言って眼を閉じると、直に落ち着いた寝息

を立て始める。A子もそれを見て、呼吸を合わせながらゆっくりと瞼を下ろした。

「おやすみ、B子。……好き、よ」

天国の空には、きつと透き通るような青の水彩が引いてあるのだと思う。そうでないと、目が覚めてから隣にいるのが誰なのか分からなくなってしまふから。

ダム

A子は病室にいる。吊るされて動かない両脚と、穩やかに晴れた秋の空を見ながら目覚めた。

目が覚めてから、一人でいる間ははずつとB子のことを想っていた。B子が虚空を見つめてはらはらと、袖で目尻を拭うこともなく、静かに流していた涙の意味を考えていた。

お前は莫迦だと父親に言われた。母親はその横で女々しく泣いていた。何だってそんなにめそめそ泣いているのかと、そう訊くと母親は幾秒かの沈黙の後で、とうとう声を上げて泣き始めてしまった。その眼差しは困惑か、あるいは失望だったと思う。煩いのは嫌いなのに。泣きたいのは私とB子だ。

担任も教頭と一緒にやってきた。若い、意志の弱そうな男の担任は、面倒事が心底厭だというのが顔に出ている。かの担任は不真面目で成績も悪いA子を早々に切り捨てて、受け持つ前から成績優秀なB子に目を掛けていた。教頭にB子はどうなりましたと訊くと、ぼつりと言亡くなったよと言うから、まあそうだろうなどと、訊く

前から分かつていたような顔をした。

B子の両親は来なかった。母親は、私に気を遣って来ないのだと言う。母親はやつれていて、何も気にせずちゃんと寝たほうがいいと言おうと思つたが、また泣かれても困るのでやめた。

彼らが、A子さんの心身を鑑みて遠慮させていただきます、なんて尤もらしい理由を付けて彼らが来ない気なら、這つてでも殴られに行つてやりたい。B子が死んだのはお前のせいだ、そら、そら、何故出来ないお前だけ生き残つたのだ、と。その方が、自分が生きてると思えるから。いくら生きてる実感を与えられたつて、そんな何の役にも立たないけど。

A子はB子に饞の言葉を届けられないまま、とうとう一人で誕生日を迎えてしまった。彼女にはどうしてもそれが受け入れがたく、許せなかった。B子はケーキを買ってきてくれないし、蠟燭に火を点けてもくれない。私はB子の十六歳の誕生日をきちんと祝つたのに。B子は何をしてるんだろう。

あのテニスマケットはどうなつただろう。B子、元気

かなあ。

「元気も何も、死んじゃってるんだけどね、はは」

A子は誰もいない病室で一人せせら笑う。

天国があるならそれでいい。どちらにせよ、B子には会うのだ。私のことをずっと好きでいてくれるB子に。だから、もうこの世界に意味などなかった。

*

「B子。天国には、宿題がないといいね」

歩きながら、A子はおよそこんなことを言った。

A子がB子の手を引いて、車止めをすり抜けた。防寒具一つ身に付けない冬服姿の彼女たちは、突き刺さるような寒さを少しも感じさせない軽やかな歩みで天端を進んでいく。

「そうね、A子ちゃん。きつと、ないわ。大学受験もね」

天端は幅にして六メートルほどで、二人で並んで歩く分には何の不自由もない。もつとも、今から死のうとする私たちには、天国へ続く道の幅が何メートルあるかなんてどうでもよいのだ。

無機質なLEDの白い光を放つ街灯が、等間隔に並んで私たちを冷たい死へと導いていく。顔を見せたばかりの月は、挟られた半月の月明かりをダム湖の水面で静かに揺らしていた。この湖をぼんやり見ながら歩いていると、まるで橋を渡っている気分になる。そうすると、さしずめここは三途の川とでもいったところか。

よく冷えた水に、深く深く、手を繋いだまま沈んでいく。そんな終わりでもいいかもしれない。水の底には冷たい死があつて、私たちはそこでキスをして永遠を誓い合うのだ。ずっと、身体が沈みゆく感覚に身を任せて。

暑い夏の日に、学校を抜け出してアイスを食べた。雄大な山の景色に囲まれて、ずっと一緒にだよと、何度もキスをしたのを思い出す。A子のずっとと私のずっとは、いつの間にかすれ違っていた。それなら今こうやって、無理矢理にでもくっつけてしまえばいい。この狭間では何をしたらいいのだから。

「ぼーっとしてるね、B子? どうしたの?」

どどどどどと、滝のような音が大きくなって私は我に返った。天端も中程まで来て、すぐそこで水が流れ落

ちているのだ。

「私たち、ここで、キスしたわよね。夏の暑い日に」

A子はきよとんとしたような表情の後に、にやにやとして私にくるりと身体を向けた。スカートの裾がふわりと跳ねる。

「ふふつ。したいの? ……しよっか」

こくつ、と頷いてから、私たちは手を繋いだままキスをした。流水の騒音に任せて、二人は好きだと言い合った。脳に直接響く声がくらくらとした甘い刺激を作り出す。見つめ合うA子の舌は熱くって、私の舌が火傷しそうになる。

「二人とも処女のまま死ぬのって、なんかすごく興奮する。そうじゃない?」

変態みたいだなと思ったけど、私まで変態になるのは嫌だから、そうねと軽く返した。

それから、私たちはどちらからともなくローファーを脱ぎ、つま先を向こうにして丁寧に揃えた。そして静かに欄干へ上り、最後にさつきより固く手を繋ぐ。決まりきった儀式のようにして。安っぽい銀色の欄干はよく冷

えていて、靴下を脱いでいたら引っ付いて離れなくなっていたところだ。

力を込めて赤くなつた掌を包み込んでくれたA子の手は暖くて、それだけで顔まで熱くなりそうだった。

上から見る小さな発電所が汚い緑色に光っているのを見ながら、私はこの世界からの離脱を覚悟した。死という未知に恐怖、あるいは興奮しているのも相まって、B子の膝は少し震えていた。無骨な欄干は、もはや私たちがそこに立ち続けるには心許ない。

B子がA子の掌を強く握ると、彼女も冷たく汗ばんだ私の手を優しく握り返してくれる。A子はそれから、何も言わずに私の頬を撫でた。暖かかったけど、彼女の手は濡れていた。

「私たち、今から死ぬんだよ。泣いてちゃつまらないよ」私は慌てて、ごめんなさい、と袖で目を拭う。何度か深呼吸をして、私は自分に言い聞かせるように声を出して頷いた。

「B子の死ぬところ、見たかったな」
きつと綺麗なんだろうな。

「私も、A子がどんな風に死ぬのか、見たかったわ」

きつと綺麗に違いないわ。そして最後にもう一度と、私たちは熱い視線を交わす。漏れ出る吐息の温度を感じながら、B子はやっぱりまた涙が零れてしまいそうになった。

「手、離さないでね」

「うん、離さないよ」

A子もB子も死ぬならここだとお互いに考えていたのだろうなど、初めてここでキスをしたときからそう考えていたのだろうなど、今になってやっと思う。心臓の音が放水よりもうるさくなって、B子は吐きそうになった。二人は目を見てお互いに軽く頷く。身体を前へ倒すと、ふわりと足が離れた。それは一瞬のことで、その間A子はずっと微笑んだままだった。私もちゃんと笑えているのかな。

重力に引かれゆく中で、ふつりと、街灯の光が消えたような気がした。

*

あれから一週間くらい、A子の様子が変だった。私に何

か言いたげで、でもどうしてかそれを躊躇っている。A子はいつだつて自分に素直なはずなのに。彼女はしたい時にキスをして、したい時に抱きしめるのだ。私がそれを拒まないのを知っているから。

時折B子からそうしてあげると、A子は社会的な満足と肉体的な満足が一緒になったような顔をする。

「B子、私と一緒に死のうよ」

それから、思い詰めたような顔をして、彼女はそんなことを言った。

「あら、どうして？」

「勉強、辛いつて言つてたでしょ？ 助けてあげる。いつものダムで、飛び降りるの」

ダム、と聞いてB子は少しぞくりとした。

通学路の途中にダムがあつて、私たちはそのダム湖を望みながら毎日通学している。湖の向こうには刑務所があつて、小さい頃は刑務所の見える通学路を逃げるように通り抜けたことをよく覚えている。得体の知れない何かは確かにそこにあるという、言いようもない恐怖があつた。

私たちと向こう側には湖という確かな隔絶があつて、正

しいことと正しくないことを二つにすっきり分けているようにも思われるのだ。だからダム为天端に立つてその狭間にいると、正しくあることもそうでないことも強いられない、何にも縛られていない私を感じられた。何をしたっていい、そう思うとB子は自然とA子に唇を重ねてしまう。A子は私をよくそこへ連れて行きたがった。

「大丈夫よ。死ぬほどじゃないし、あなたを道連れにするつもりはないわ」

「いいから！ 今夜、B子の家に行くからね、分かった？」

A子は苛々して声を荒らげる。

B子が「テニス部を辞めて東京の大学に行く勉強をする」と用意もなくA子に伝えたのは、卒業しても遠距離恋愛でも頑張ろうね、だなんて甘い考えのせいではない。それでも彼女は頑張つて私に着いてきてくれるだろうという期待と、私たちにはいつか終わりが来るんだと突き放そうとする気持ちが入り混じっていた。

A子は私との永遠が欲しいのだ。A子は悩みなながらもずっと、B子との永遠の未来をまっすぐ見つめていた。そんな彼女が無理にでも私との永遠を作り出そうというの

は、素直なA子らしい結論だと言える。

B子が勉強を苦にして自殺するだなんて、彼女は当然思っていない。本当は、A子だつて分かっているのだ。永遠なんてないことを。A子もB子もいつか制服を脱いで大人になることを。彼女は私が諦めた永遠を、もがき続けて手に入れようとしているのだ。

A子はなんて不器用で可愛いんだろう。全力の愛に、私はいつも陶醉してしまう。だから、この期限付きの恋愛感情に任せて人生全部を彼女との永遠に捧げてしまつても、別に後悔はない。そう思う。

「ええ、分かったわA子ちゃん。ありがとうね、好きよ」「私も好きだよ、B子。本当に、好きでたまらないの」

*

校長によると、春にアンケートで「学校生活は楽しいですか」と問われた彼女たちは、二人とも「はい」と回答していた。いずれも悩みなどは書いていなかった。その一方で、二人のうち死亡した十六歳の少女は、最近になって部活を辞めたばかりだったという。

色盲

B子は私が好きだ。たぶん。

何でも持っているあのB子が、どうして私を好きなのかは分からないけど。

彼女はA子よりも少しだけ背が高く、キスをする時はいつも私に合わせるかがむのだ。B子は夕陽を背にしてキスするのがお気に入り、彼女が私の肩を抱くたびに、綺麗な長髪のフィルターをすり抜けた透き通ったブラウンの光が私に投げかけられる。彼女が身体を揺らすとその光もゆらゆらとついて回って、目を閉じててもその様子がぼんやりと分かるから、キスの間ずっとB子が私の手を引いて綺麗な水の中を泳いでいるような気持ちになる。

少し腰をかがめたB子は私と唇を重ね、とろとろとしたものを流し込んでくる。頭の中に広がる海は都会の空気なんかよりはずっと綺麗で、彼女はそれを口移しで私に渡すのだ。B子が甘い液体を私に注ぐたび、それは色んな所から脳味噌に染んでいって、それから身体の一つ一つがB子の色に書き換えられていくように感じる。

「不思議だわ。あなたにいくら愛をあげても、私の愛はなくならないの」

彼女がくれる愛が私の中に溜まっていって、それがA子とB子を切り離すまいとするのだ。そう信じるのが、私には永遠かなにかを叶えるまじないのように思えてならなかった。

*

B子はいつも思っている。A子の目には、陽射しはど
う映っているのだろうか。

彼女と放課後の教室で向かい合うたびに、A子は私の知らない目をするのだ。私たちがいるところよりもずっと向こうを見ているような、穏やかで寂しげな視線に、私はなんだか泣きそうになる。あんなに遠くにある太陽の視線が、私よりも暖かくて優しいなら、太陽とキスしたほうがよっぽど気持ちいいと思うから。

B子はいつも心配している。A子が私から離れていたりしないかと。

綺麗なものや汚いものに心惹かれて、どこかへ行つて

しまうのではないかと心配してしまふ。私より気持ちいい何かに夢中になつて、A子の一番が私ではなくなる時がいつかやつてくるのだろうか。誰かに乱暴をされて、そのまま拐かされてしまったら、A子はいつまでB子のことを忘れられずにいられるだろうか。

だからいつも私はA子に愛を流し込んで、他の誰も入る余地がないように縛り付けているのだ。

A子は当然そんなこと知らないし、こんな醜い私を教えたくはない。彼女はB子を完璧だと言うけれど、私の心はいつもぐちゃぐちゃで、ずっと歪んだ愛で打ち震えている。相手も知れない嫉妬と絶望への妄想が過ぎる日は、彼女に与える愛よりも私に溢れる愛が多くなって、溺れ死んでしまいそうになる。

今だってそうだ。もっと私を見てほしい。私だけを見てほしい。私の知っているA子でいてほしい。

「私、A子ちゃんの色が欲しいのよ」

抱きしめて耳元で囁くと、A子の身体がぴくりと跳ねる。夕陽に浮かび上がるその笑顔には、驚きと戸惑いが混じり合っていて、でもそれが段々と無邪気な喜びで隠

されていくように見えた。

*

「A子ちゃんが上になるキス、初めてかもね」

私が太陽を背にして、椅子に座ったB子が私を見上げる。いつもは髪を通る陽射しが、今はつやつやと輝く光の輪を作っていた。

「B子ちゃんが目、とっても綺麗だよ」

逆光でよく見えなかったB子の瞳も、今ではその明るい茶色の台座に広がる精緻な模様の一つ一つをはっきりと手に取るようにして眺めることができる。瞳孔から放射状に浮き出た無数の筋が、宝石のように整った一つの作品を作り上げているように見えた。

「ね、早くキスをちょうだい？」

A子からするキスは初めてで、それほどまでに私はB子に寄りかかっていたのだと思う。

自分の中から取り出した色を口移しでどろどろと流し込んでいくうちに、私は彼女と繋がっていくことを意識する。薄目を開けて彼女の様子を見てみると、目を瞑っ

たままのB子が頬を赤くしながら喉を動かしてこくこくと私の色を飲み込んでいくのが見えて、ひどく興奮した。首元に当たる陽光の影が、B子の鼓動に合わせて形を変えていく。

冬の教室は寒々しくて、手や脚が心地よいほどによく冷える。身体の中から溢れ出す体液だけがただそこに、熱く流れ出していた。

何分かそうしているうちに、私の視界がぐらりと揺れて、たちまち世界が灰色に変わっていく。

「んっ、A子ちゃん……もう、おしまい？」

じゃあ、次は私の番ね。

B子はそう言っていきなり立ち上がったかと思うと、ちう、と私の唇から何かを吸い出し始める。その不思議な感覚に思わず目を開けると、彼女もまた夕陽にきらめく瞳を私に向けていた。頭の中が何も考えられない気だるい心地よさに覆われていつて、私はB子から目を離せない。

見詰め合いながら脳味噌から無理矢理何かを引っこ抜かれる感覚に抗う——あるいは従うようにして背伸びするけれど、それは些細な抵抗で、長いキスが終わるまで

唇の端からA子の弱々しい喘ぎ声が止むことはなかった。

彼女はその捕食を終えると、それを口の中で何度か転がしてから、取り出して指でつまんで軽く眺めてから床に落とす。ことつ、と少し硬い音がした。色のない世界で唯一紫に光っているそれは、大きめのビー玉くらいのサイズで、青と赤が混じり合っていない部分がひときわよく輝いている。

あつ、と私が声を上げるより先に、B子はその綺麗なビー玉を踏みつける。それは何の抵抗もなく、ぐしゃりと溶けかけの飴玉みたいな音を立てて潰れてしまった。すっかり潰れた飴玉はもう二度とは光らずに、靴と床の間にぬるりと汚い糸を引いたつきり空気にじわりと溶け込んで消えていつてしまう。

「A子ちゃん、私よりえっちだったのね。でも、もうこれからはこんなもの、必要ないのよ？」

*

あれから、私にはすっかり色が分からなくなった。灰色の世界で、B子が私の手を引いてくれる。

B子は前より夕陽に見とれる時間が多くなったから、きつと私のプレゼントを気に入ってくれているのだろう。彼女が私を受け容れるたびに、それは彼女と混じり合って新しい色を作っていく。最後には、もはや切り離せなくなるほどにB子と一つになっていって、いつか私が持っていた色はこの世からなくなってしまうのだ。

気持ちいいこともほとんどみんなB子が壊してしまつたから、私たちのえっちは愛撫も絶頂もキスが全てになつた。私たちは毎日のようにキスをして、お互いの頭の中をお互いでいっぱいにした。キスをするたびに下からどろろりといやらしい体液が溢れて、そこがとろとろに解れていくけれど、もはやそれに意味はない。軽く触って、また濡れてるわ、とB子が軽く笑う。

夕陽に照らされるB子の瞳は深いグレーの輝きを一層増して、前よりもっと綺麗になった。その艶はまるで何度も丁寧にチョコレートでコーティングされているみたいで、B子とえっちするたびに舐め取って口の中でどろかしてしまいたくなる。B子はきつとそれを許してくれるけど、我慢できずに両目を食べてしまったら彼女も困

るだろうと思つて、やめた。

「A子ちゃん。夕陽で髪が光つて、とつても綺麗だわ」
彼女が私があげたその色で私のことを見ているのだと思つと、見つめ合うたびに顔が熱くなる。

「ねえ、B子ちゃん。私のこと、好き？」

でも時々、思うのだ。こんな何もなくなった私でも、B子は好きでいてくれるんだろうかと。

「好きよ。今までの誰よりも、これから先の誰よりも」
彼女は少し黙つてから、私の目を見てそう答えた。

*

B子は私が好きだ。たぶん。

私はそれだけで嬉しいのに、B子がなんで泣いているのか分からない。だから私は目を瞑つて、好きだよと言いながら彼女の手を引いて永遠に灰色の海を泳ぐのだ。ずーっと、遠くに向かつて。

あとがき

この冊子、「Automation」は百合SS Advent Calendar 2016の副産物であり、主目的である。つまり、公開された短期の締め切りを複数用意することによって、原稿を比較的容易に完成させられるのではないかという試みの結果となっている。

印刷にあたって公開済みの作品に些細な修正を加え、自分が気に入った二つの作品をこの本に収録することとした。以下、掲載作品の背景、世界観、書き上げての所感などを書いていこうと思う。

*

冒頭の「煙突」は、書き下ろしの作品である。某県にある「ラサの大煙突」のことを考えながら書いた。もはや麓の鉱山は閉山し、精錬所も過去のものとなっている。大煙突はその役目を終え、もう二度と大気汚染物質を吐き出すこともない。街のランドマークとしてただそこに静かに立っている姿は、もはやピラミッドよりも高い巨

大な墓標である。墓標のもとで人が燃やされていたとしても、きっと何の疑問も起きないだろう。

もし二人が死の連鎖から逃げ出すことができたなら、狭いアパートの一室でキスをするのだと思う。平和になった世界は静かで、誰にも邪魔されず昼過ぎまでだらだらと寝ていられる。ばさりとやった布団から陽射しの隙間に埃が舞い上がって、それを見て思わず口に手を当てた二人が、顔を見合わせてくすくすと笑い合うのだ。こんな幸せなことがあるだろうか。

それはそれとして、「煙突」のアンドロイド軍団が死体を集めて楽しそうに巡回している様子を、また何かで書いてみたい（むしろ絵にした方が映えるテーマだとは思うが）。死体を集め燃やすために造られ、そこに存在する彼女らの眼には、弱りながら逃げ回る生者たちはどんな姿に映っているのだろう。

*

次の「ダム」は、とある事故のニュースを目撃して書くことと決意した作品である。一週目の作品で、百合SS Advent

Calendar 2016を始めようと思ったきっかけでもある。大学進学という人生での大きなイベントを前に、夢を見る少女と現実を見る少女の交錯を書いた。最終的には、どちらも夢に向かって旅立ってしまったが。

誕生日プレゼントのテニスラケットは、B子と一緒に燃やされたか、あるいはまだ生前の彼女の部屋に放置されているかもしれない。テニスとA子から決別するためにと行って、B子がその手ですっきり壊して捨てていたら、もつといいと思う。心がすっきりA子を忘れても、大事なモノを自分の手で壊したその感触は絶対に消えないだろうから。

今回は結末が既に分かっているので先に書き、セクションが変わるごとに時間を遡るスタイルを適用している。本当は逢瀬の様子を目撃した友人を登場させようと思ったのだが、どうもC子（またはC男）はいくら書いても水差しにしかならなかったので捨てた。

*

最後の「色盲」は、三週目の作品である。描き下ろし

作品の執筆や組版などに気を取られているうちに、このあたりから徐々に遅れを見せ始める。とりあえず日曜日に間に合わせてみたが、割といい作品になったと思うので掲載した。

彼女らの感情は（そしてはおそらく呼吸や鼓動などの生体機能すらも）物理的な形に変えて自由に取り出した取り込んだりすることができ。今回は適当に、純粹□型概念体液と呼ぶことにした。体液の交換は彼女らが互いを信用しているからなせるのであって、そもそも、自分の全てを奪われるかもしれないというのに誰彼構わずキスをするということもなからう。キスはただのセックスよりもずっと人間らしい営みで、この世界ではもつと強い意味を持っているのだ。

B子はA子に何の遠慮もなく寄り添ってほしいのだけれど、たぶん、自分に自信のないA子は変なところでB子と距離を置いているのだ。B子の誕生日会を開くと言われたA子は、参加したいけれど自分が誘われているとはきつと思わない。B子はむしろ二人きりの誕生日会がしたいくらいなのに、A子は楽しんできてねと寂しそう

に言うのだ。A子がB子とキスをするのは、彼女がそうしていいと思っっているのは、放課後の教室だけだから。

*

当然ながら、全編通して出てくるA子とB子は、各話の間で同一性を保持していない。その様子を見てみると、生まれては消えてゆく泡沫のようで、少し儚い。「色盲」の彼女らはきつと消えずに色彩豊か（でない）世界を楽しんでいると思うけれど、一方で死んでしまった世界の彼女らはどこへ行くのだろうか。

私は登場人物の名前を考えるのが苦手で、話を進める前にそこで詰まってしまう。私にとって名前は単なる識別子だから。表紙の娘も、頑張って自分で描いた割には薄情なことだけれど、自動人形ちゃんとも呼んでいれればよろしい。自動人形ちゃんは、今回ここには掲載しなかった「電波」のキャラクターをイメージして描いたのだが、組版を終えて眺めてみるとここに「煙突」の性質も見いだせるように思う。

私にとってこのA子とB子の試みは、全てを解決する画

期的な解決策である（と今は信じている）。しかし、もしあなたが本編の空気を気に入らないと感じたのなら、例えば、好きなキャラクターのカップリングで深夜のダムに足を運ぶ様子を妄想してみてもどうだろう。会話にもっと肉付けがされて、飛び降りるの様子がもっと輝くかもしれない。愛を持って、キャラクターを動かそう。

*


今回は第二十四回文学フリマ東京にて同様の短篇集「section」を頒布する計画を練っている。時間があるのでもっと厚くなるかも。

P.S. A子は「あこ」で辞書登録している。

-
- ◆書名 automation
 - ◆発行者 片桐天音
 - ◆発行 変態美少女ふいろそふい。
 - ◆発行日 2016/12/30
 - ◆印刷者 株式会社エー・ディー・ピー
 - ◆連絡先 circlemaster@hentaigirls.net

表紙イラストを含む全ての作品は CC BY 4.0 でライセンスされており、ライセンスの条件に従っている限り自由に利用できます。CC BY 4.0 の詳細は以下の URL で確認できます。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

A black silhouette of a person with a ponytail, holding a long white banner. The banner contains the Japanese text "変態美少女いろいろそふい。" written in a handwritten style.

変態美少女いろいろそふい。